

建築家・下田菊太郎に関する若干の考察

― その生涯と業績について ―

池田 憲和

1、はじめに

建築家・下田菊太郎については、県内で刊行された人名辞典等にその記載が見当らず、全く忘れられた人物である。

この人物の再発掘のきっかけは、全国的な近代建築保存の調査であったという。それによれば、昭和44年1月、朝日新聞に「保存したい明治の建物」とのタイトルで、長崎市にある下田設計の旧香港上海銀行長崎支店がリストアップされた。これをみた下田の長男・下田辰雄氏が、朝日新聞社に下田の著書『思想と建築』を持ち込み、建築家・下田菊太郎の存在が再確認されたものといわれる。

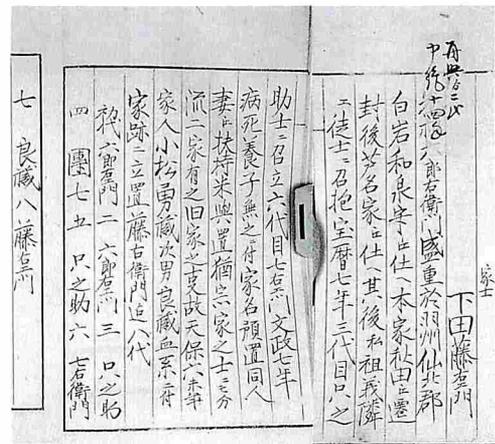
その後、近江栄氏の研究論文と林青梧氏の伝記により、下田菊太郎の生涯と業績はかなり明らかとなった。しかし、『思想と建築』には、相矛盾する記述も散見され、これに基づく下田像は、再検討する必要がでてきた。これが、本論の執筆の理由である。

2、下田家の出自について

出自については、自伝『思想と建築』に「I am the son of a Sumurai, of Marquis Satake's clan」とあり、秋田藩士の子とし「仙北郡角館町」に誕生したことがわかる。父は、「幼名勇助、藤右衛門、順忠と云ひ、柳橋五郎兵衛の次男にして下田家を継いだことが記されている。下田勇助の名は、「万延元年 角館絵図」の徒歩町の南西隅に見える。

下田家の系図は、秋田藩に提出された系図類には見えない。ただ、明治6年(1873)2月

に旧主・佐竹義尚が県に提出した文書があり、佐竹北家の家臣であったことがわかる。



「佐竹義尚筆・家士歩行十九名家系調書」(1873年)

3、幼年時代から青年時代にかけて

①、角館時代の住まいと生活

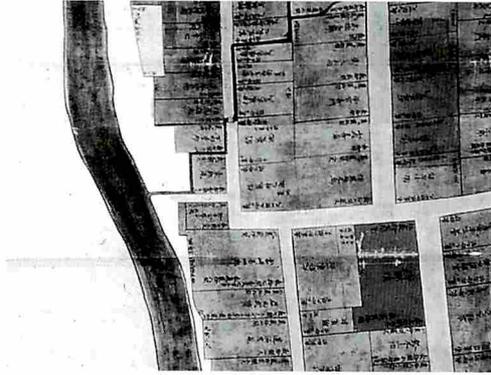
下田菊太郎の生家は、自伝によれば「予の旧宅は市街の西南方面に潺々たる小流の東岸に位置を占め」ており、前述のように徒歩町の一角にあったことがわかる。

屋敷の規模は、万延元年(1860)の絵図に「表7間、裏へ14間」と記されている。これは、角館町に現存する松本家の屋敷と同規模であり、住宅自体も松本家とよく似た外観だったものと推定される。

父の実家・柳橋家は、同じ徒歩町のやや北寄りの向い側にあり、初孫であった菊太郎は祖父と散歩したことをなつかしく回想する。

父・下田藤右衛門は、武術を鍛練し佐竹北

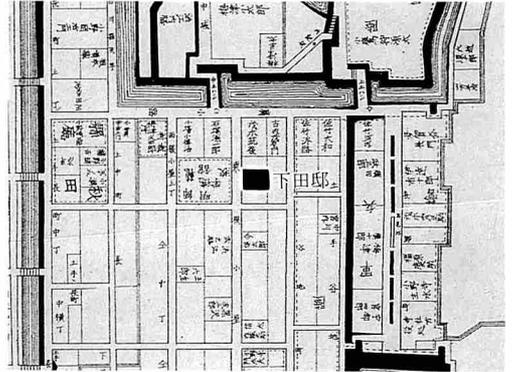
家に仕え、武士の内職とした櫻皮細工で相当な資財を貯え、明治戊辰戦争では佐賀藩の黒船をみて、新時代の到来を実感したという。



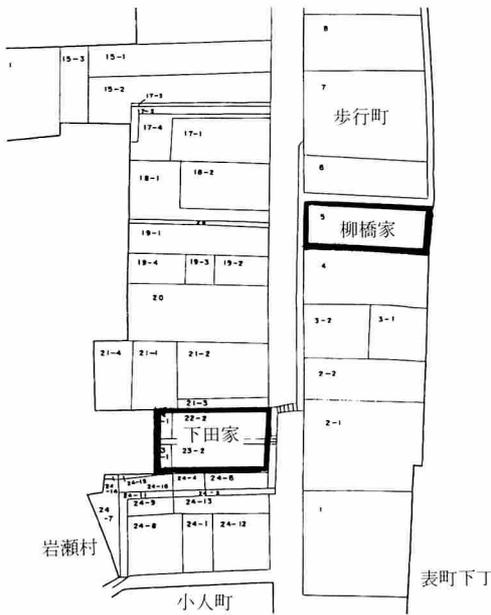
角館絵図 (1860年)

の所有地として維持された。

旧寺崎邸は立派な薬医門をもつ宏壮な住宅で、生涯で最も幸福な時代を過ごした。



秋田市街図 (1868年)

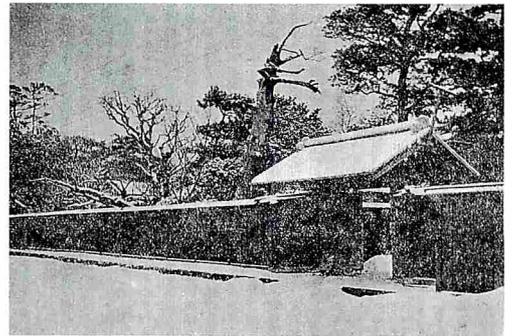


角館地籍図

②、秋田時代の住まいと生活

明治4年(1871)、一家は雄物川を下り秋田市手形町に転居した。場所は「宝鏡院山下」であったが、正確には分からない。

その後、東根小屋町の寺崎広業父邸を買収、ここに転居した。転居の時期は明らかでないが、ここは明治20年(1887)8月まで下田父子



東根小屋町の屋敷

③、近藤漢学塾に入門

父は、秋田市手形町に転居し、「直ちに余を2・3丁距たりし近藤漢学塾に入学」させた。

手形町には、このころ神澤素堂の神澤塾(積善学舎)や西宮藤長の四如堂などの有名な私塾があったが、近藤漢学塾については不明である。手形西新町に近藤久蔵の名が見えるので、これが塾の経営者かも知れない。

明治初期、士族出身の子弟が漢学を学ぶことは通例で、「先づ大学の素読に余が求学の第一階を踏み出す」ことになった。

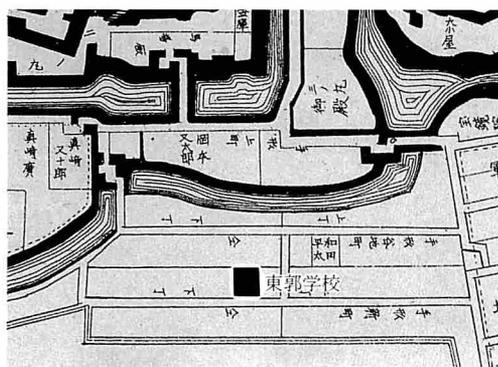
なお後のことではあるが、中学時代も漢学の学習を続けており、史記・春秋左氏伝・文章軌範などを稲川直清・小松弘毅・片岡政平

の3人について学んでいる。

④、東郭学校から太平学校附属小学校へ

明治5年(1872)学制が実施され、手形町に「東郭学校が設立せらるゝや、第一番に」下田は入学した。そしてここに学ぶこと1年余り、同級生の後藤とともに、明治7年(1874)4月、太平学校に編入している。

東郭学校は、手形新町下丁の西宮藤長私邸の地に、明治7年8月に設立された。したがって、自伝に記す東郭学校入学及び太平学校編入の年代は、再検討する必要がある。



東郭学校位置図

⑤、秋田師範学校中学師範予備科時代

イ、天皇行幸記録にみえる在校生名簿

自伝によれば、彼は明治12年(1879)に入学した。しかし、何月に入学したかは不明である。

この学校は、太平学校変則中学科と称したものを改組したものである。明治11年(1878)12月の秋田師範学校規則によれば、就学年限は3年、これを6級に分けて毎級6カ月の習業とし、第三学年第二期は第一級となる。学年は8月21日に始まり、翌年の7月20日に終わる。第一学期は8月21日から2月6日、第二学期は2月7日から7月20日となっていた。

秋田県公文書館所蔵「明治14年(1881)9月御巡幸御用掛事務簿天覧物取調掛之部5番」には、たまたまこの時代の名簿が記載され、下田菊太郎の名が見える。

中学師範予備科第一級生

佐々木為吉
窪谷格也
栗林甲子太郎

中学師範予備科第二級生

山口祐之助
飛澤鉄太
湯瀬禮太郎
佐野多一郎
鳥山克四郎

中学師範予備科第三級生

鈴木鉄三郎
笹木克己
三浦由蔵
高橋武蔵
島田俊助
深井傳五郎
横山恭助
斎藤 篤
下田菊太郎
根田朝之助
田代茂吉
照井八十八
港 竹治
鈴木録三
永井和助
小林直吉

中学師範予備科第四級生

長崎惣太郎
江畑久蔵
黒丸惟一
塩谷鉄綱
田名部慎蔵
小西弥三郎
羽生千代治

中学師範予備科第五級生

小野崎才治
櫻田源治
熊谷市之助
野呂田八十八

浅野千代治
 小瀬千蔵
 村山休助
 藤谷四平
 藤野利吉
 森川 忠
 志賀清六
 川瀬助吉
 川井一郎
 寺内虎之助

中学師範予備科第六級生

大森虎之助
 小西友治
 片岡誠治
 平元炙治
 伊藤長次郎
 岸 学助
 益戸直治
 武藤秀三郎
 須田直太郎
 栗林卯吉
 後藤運忠
 疋田虎之助
 伊勢末吉
 武藤七太郎

総計 六十人

この資料では、下田菊太郎は予備科第三級生であった。先述のとおり明治12年の入学であれば、仮に同年8月の入学としても第二級生でなければならない。そうすれば、彼の入学時期は明治13年2月で、自伝でいう明治12年は誤りということになる。

当時、秋田師範学校は明治14年6月の火災で全焼し、西根小屋町の女子師範学校に仮住まいしていた。この名簿は、同年9月・明治天皇の天覧授業のために提出された書類の一つで、中学師範予備科の実態を示す数少ない資料である。

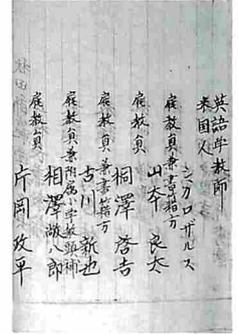
口、中学時代の教師と友人たち

前掲資料には、秋田師範学校々員として下

記の人々が見える。

学校長准教諭 田中精一
 教諭 鳥居佶夫 教諭 岡田好成
 教諭 高田芳太郎 教諭 濱野虎吉
 教諭補 教諭補兼監事
 葛野伴二 根岸秀兼
 英語教師米国人 雇教員兼書籍方
 シ・カロザルス 山本良太
 雇教員

桐澤啓吉
 雇教員兼書籍方
 古川新也
 雇教員兼附属小
 学教頭補
 相澤徹八郎
 雇教員
 片岡政平
 雇教員寄宿舎長
 五島顕徳
 雇教員
 大山重寛
 雇教員寄宿舎長
 金子典三
 雇教員
 桐澤友之助
 雇教員助手兼書籍
 方兼生徒掛
 笹本 恕
 雇教員寄宿舎長
 田村力三郎
 雇教員兼小学掛
 小田部吉郎
 書籍館副長
 進藤久治
 諸務方
 田中数馬
 用度方
 黒木忠兵衛



カロザース



鳥居佶夫



中村重惇

下田菊太郎が中学師範予備科で特に師事した教師は、片岡政平、カロザース、鳥居佶夫

⑦、三田英語学校時代

そこで下田は、中学師範予備科の先輩で当時工部大学校鉱山科3年生であった石田八弥の懇篤な忠告に基づき、三田英語学校に転校した。この学校では、「多久幹一郎、永井尚行、上野清其他諸先生の教訓」を受けた。

石田八弥は、文久3年(1863)5月の生まれで旧姓・奈良。秋田県令・石田英吉の女婿となり、三菱製錬所長を務めた。下田は「屢々石田氏の来訪を受け、有益なる指導を受け得た」ことが、「(工部大学校)入学試験に合格せし第一原因なりき。」と述懐する。

多久幹一郎は、嘉永5年(1852)5月佐賀藩家老・茂尚の長男として誕生した。明治4年(1871)アメリカ・ニューヨークのニューブランズウィック校に留学、内務省・宮内省に出仕し東宮侍従を務める。

永井尚行は、文部省に出仕。東京大学予備門御用掛などを務め、明治14年(1881)2月から三田英語学校の教員となっている。

上野清は、安政元年(1854)7月東京都の生まれで有名な在野の数学者。東京数学院、東北中学校を創立、私学経営者としても活躍した。

下田は最初寄宿舎に入り、吉井友兄・伊集院彦吉・山之内一次・尾崎紅葉・財部彪らと同宿。吉井・伊集院・山之内・尾崎は東京大学予備門、財部は海軍兵学校に進み、後にいずれも名をなした。その後、下宿屋に移り、工部大学校入学試験準備に熱中。

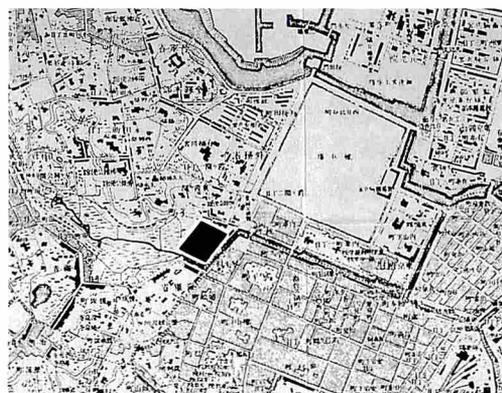
下宿の隣室は森田思軒、本名・文蔵。文久元年(1861)7月、岡山県生まれ。慶応義塾出身で郵便報知新聞社員。「内外の事物に対し、斬新なる智識」を与えられ、森田の人格に深く傾倒したという。森田はその後、翻訳文学の発展に貢献。惜しくも46歳でなくなっている。

明治16年(1883)3月、念願の工部大学校を受験。50人の合格者のひとりとなった。下田はまだ18歳、合格者のなかでも比較的若いほうのひとりであった。

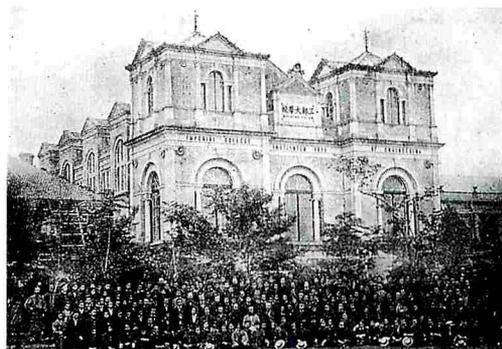
⑧、工部大学校時代

イ、工部大学校について

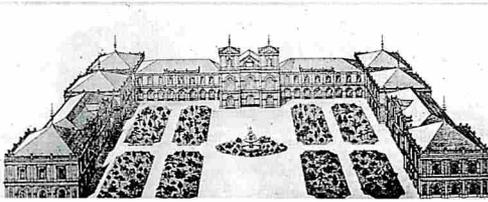
明治6年(1873)8月、工部省工学寮に大学校として誕生。明治10年(1877)1月、工部大学校と改称、工作局に属した。校長は局長の大鳥圭介が兼任、都検(教頭)は英人ダイエル。イギリスのグラスゴー大学を模範とし実践重視を掲げ、学理優先の東京大学理学部と好対称をなした。修業年限は予科2年、本科2年、実地科2年の計6年、明治12年11月卒業の第1期生から同18年5月卒業の第7期生まで、総数211名に達した。これは、同期間の東京大学理学部の工学系学科の卒業生に比べ約3倍であり、工部大学校が当時の高等教育の中心であったことが知られる。



位置図(工科大学の名がみえるところが工部大学校の場所)



工部大学校講堂



工部大学校鳥観図

ロ、明治16年の入学者たち

工部大学校は虎ノ門の旧延岡藩邸内に建設され、特に正面中央を占める工部大学校講堂（1877年）は仏人ポアンヴィルが設計した明治洋風建築の傑作であり、工学を志すものの憧れの的であった。

明治16年春、下田ら50名が工部大学校に入学した。『思想と建築』によれば、後の工業界の大物、横河民輔も同期生であったことが知られる。また、同書所載の工部大学校三年時の英文の成績表があり、当時の在籍者43名のうち28名のアルファベットの姓と、名前の頭文字が知られる。

この成績表と『東京大学卒業生氏名録』（1950年11月刊）をあわせみると、造家科（建築学科）に進んだ下田菊太郎のほか、土木科に進んだ長尾半平・丹羽鋤彦・岡崎芳樹・渡辺六郎、電信科に進んだ中川碩太郎・大岩弘平、機械科に進んだ高辻奈良造、化学科に進んだ外波峯次郎・本野英吉郎、造船科に進んだ寺野精一の名前が判明する。

このうち、6年の修学期間を終え、明治22年(1889)7月に卒業したものは、土木工学科の岡崎・丹羽・渡辺、電気工学科の中川、機械工学科の高辻、応用化学科の外波と28名のうち6名である。順調に学業を終えることがいかに困難であったかがわかる。

ハ、工部大学校の教師たち（予科時代）

下田は工部大学校に入学し、まず予科で2年間基礎的な教育を受けた。英文学をディクソン、数学をアレキサンダー・熊倉興作、理学を志田林三郎・藤岡市助・中野初子、化学

を中村貞吉・ダイヴァース等の教師から講義を受けたという。

ジェームス・ディクソン(1856～1933)は英スコットランドのエジンバラ大学、次いでセント・アンドリュース大学で哲学・英文学を専攻。明治13年(1880)から日本で英語英文学を講じた。専門科の選択に迷う下田と虎ノ門堀端で出会い、専攻を決めかねている下田に建築学が将来有望なる所以を説き、造家科（建築学科）に進むようアドバイスしたという。

トーマス・アレキサンダー(1847～1933)は英スコットランドのグラスゴー大学等で土木工学を専攻。明治12年(1879)から日本で土木学を講じた。下田は、専門科でも応用重学・微分積分・立体三角術の講義を受けた。

エドワード・ダイヴァース(1837～1912)は英・イングランドのロイヤル・カレッジで化学を学び、明治6年来日。工部大学校の2代目教頭を務め、無機化学者として世界的な名声を博した。

ニ、専門科へ進む

下田は予科を2年で修了、明治18年(1885)専門科に進んだ。当時建築学科の名称はなく、造家科と呼んでいた。造家科は、土木科などに比べ学生が少なく、明治12年から同18



ディクソン



アレキサンダー



ダイヴァース

年までの卒業生は20名を数えるにすぎない。下田の同期は横河民輔のみ、1年上級は中濱西次郎ただひとりだった。

造家科に進んだ下田は、コンドル・辰野金吾・曾禰達蔵・曾山幸彦から建築学や美術装飾、志田林三郎から応用重学・高等理学、井口有屋から高等動力学、吉村長策から測量学、ミルンから地質学の講義を受けた。

ジョサイア・コンドル(1852～1920)は英イングランドのロンドン大学で建築学を専攻。明治10年(1877)に来日し、日本近代建築の育ての親となった。

志田林三郎は工部大学校電信科の第1期生。土木科の南清らとその才を競った。卒業後、イギリスに留学し、ウィリアム・トムソンに師事。帰国後、電気学会創設に尽くした。

函館の堀川トネを妻にしたジョン・ミルン(1850～1913)は英イングランドのキングス・カレッジ等で地質・鉱山学を専攻。明治9年(1876)に来日。地質学を講じ、日本地震学の父といわれる。

⑨帝国大学工科大学時代

イ、主任教授・辰野金吾との対立

明治18年(1885)12月、工部省は廃省となり工部大学校は文部省に移管された。翌年3月



コンドル



志田林三郎



ミルン

帝国大学令により、工部大学校は東京大学工芸学部と合併し、帝国大学工科大学となった。

建築学は工芸学部にはなかったから、教授陣は工部大学校関係者で占められた。教授は辰野金吾、助教授は曾禰達蔵、講師は曾山幸彦・コンドルである。

辰野金吾(1854～1920)は工部大学校造家科第1期生、イギリスに留学した。建築家としての資質は曾禰に劣ったが、明治日本の時代的要請によく合った。明治19年(1886)5月、辰野金吾は工科大学教授に就任。下田は彼の講義を受け、両者ははしだいに対立する。

ロ、工科大学中退へ

工科大学に進んだ下田に不幸が見舞った。明治19年(1886)9月、秋田の父が急逝したのである。学資を得るため、海軍貸費生となって学業を継続したが、順風満帆だった下田の人生はここで一変した。

彼は精神的な不安からのがれるため、当時学生間で流行していた専門外の進化論等の書物を読みあさり、ほとんど病的な状態となった。このため、辰野金吾の無味乾燥な建築学の講義は、自分にとって暇潰しの如き考えに襲われ、まじめに聴講しなくなった。

東京英語学校・三田英語学校の講師としてアルバイトに熱中。辰野金吾と相互に悪感情を生じ、ついに大学を中退する。

中退の時期は、『思想と建築』に「明治22年」、「卒業迄で僅か一ケ年」、「同二十一年退学」など記述に混乱があるが、「明治19年度申報」により、中退は明治20年(1887)7月以前であり、卒業まで2年を残していた。

ハ、山口半六に師事する

大学を中退し、新規時直しのため渡米を決意。帰郷して母の「許可を得て、父の遺産た



辰野金吾

る不動産の全部」を売却した。これは、秋田市東根小屋町の旧登記簿謄本により、明治20年(1887)8月であったことが分かる。

母と妹3人とともに本郷区駒込西片町10番地に居を定めた。ここは帝国大学の西隣で、

同番地は枝番を伴いかなり広く、大学教授関係者や中央公論社などの建物があった。

渡米の相談には、山口半六(1858~1900)が関わった。山口は明治12年(1879)、仏のエコール・サントラルを卒業。文部省で学校建築を担当。四・五高及び兵庫県庁舎が代表作。下田は文部省で働く。

二、『欧米建築』を出版

文部省会計局雇いとなった下田は、渡米の実現に熱中した。さらに、渡米直前には日本土木会社勤務だったことが、『幕末明治海外渡航者総覧』に見える。しかし、在職期間はいずれも不明である。

明治22年(1889)6月、高木麟太郎の援助で、『欧米建築』を出版。渡米の資金を得た。内容は西洋建築を邸宅や住宅等に分類し説明したものであったが、未完に終わった。



山口半六

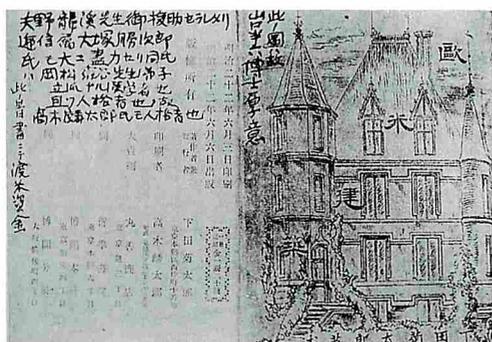
4、アメリカでの建築修業

①、A.P. ブラウン事務所に勤める

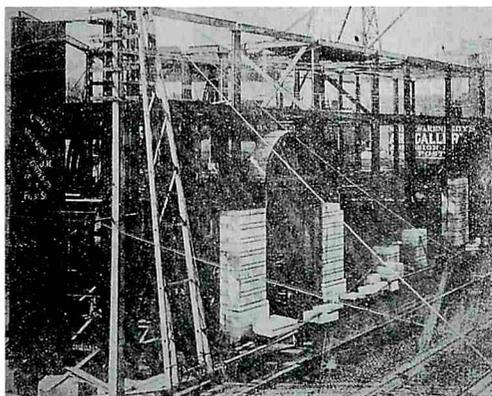
下田は、なぜ建築修業先にアメリカを選んだのか。イギリスは辰野金吾の留学先、フランスは片山東熊の活動舞台、ドイツは妻木頼黄ら臨時建築局技師の留学先、などのことがあり、新天地アメリカをめざしたものと思われる。

さて、アメリカに留学した建築家は数少ない。小島憲之(1857~1918)はコーネル大学を卒業。建築学とは無縁の第一高等学校語学教授で終わる。妻木頼黄(1859~1916)は明治15年工部大学校を中退。コーネル大学に編入学し、明治17年に卒業。その後、シャルロットンブルク工科大学でドイツ建築を研究し、大蔵省営繕で活躍した。

さて下田は、明治22年(1889)9月5日、英船ベルジック号で横浜を出港。9月23日、米サンフランシスコに到着。パリス・ホテルに投宿した。さらに、アメリカ建築家協会サンフランシスコ支部で日本建築に関する講演を行い、高い評価を獲得。ブラウン事務所の製図工に採用された。A.P.ブラウンは、仏エコール・ド・ボザールを卒業。ニューヨークに本部事務所を構え、西部に進出。当地に出張所を設け、アメリカン・ボザールの建物を次々に設計する。下田は、ここで建築設計の



『欧米建築』 (1889年)



クラカー銀行 (1889~90年)

実務経験を積む。シカゴ万博に参加するチャンスもここで生まれた。

②、シカゴ万国博覧会に参加

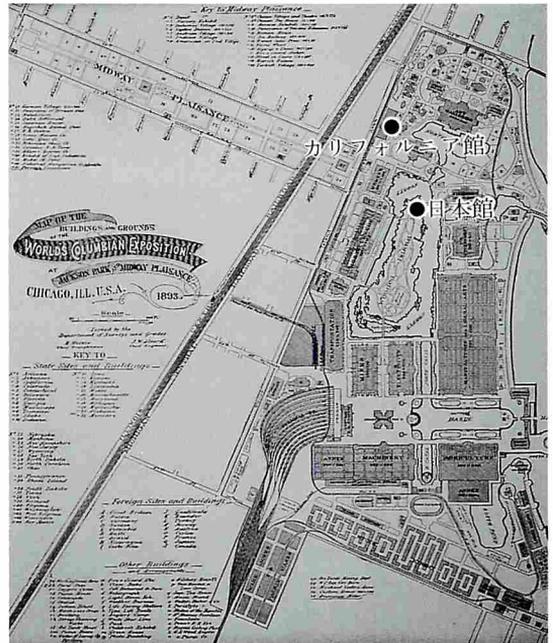
シカゴ万博は、コロンブスのアメリカ大陸発見四百年記念として企画された。当初は1892年に開催する予定であったが、会場工事の関係で1年後の1893年開催と決定。会場は、ワシントン公園とジャクソン公園をミッドウェイ・プレザンスで結び、ジャクソン公園を主会場とした。

ジャクソン公園には、各国パビリオンのほか、アメリカ合衆国と各州の展示館が次々に建設された。日本は会場中央の森島の北端の好位置を確保し、宇治平等院鳳凰堂を模した日本館を建てた。工事監督は、久留正道。特異な建物は注目の的であった。

下田は、会場北部に配されたカリフォルニア館の工事に関係した。設計は、A.P.ブラウン、工事本監督はシカゴのワイトが務め、下田は工事副監督としてシカゴに派遣された。万博会館建立式は、1892年10月21日に举行されているので、下田のシカゴ赴任の時期もこのころと考えられる。

シカゴ万博のメイン会場は、アメリカ古典主義建築で統一され、ホワイト・シティーと呼ばれた。しかし、建物は鉄骨構造で建築され、サリヴァン(1856～1924)設計の交通館では近代的なデザインが駆使された。また、ミッドウェイ・プレザンスは世界各地の民族文化を紹介、新大陸開催万博の特色をいかになく

発揮した。万博は5月1日～10月30日まで開催、盛況を極めた。



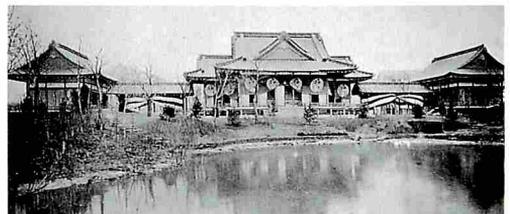
シカゴ万博会場図 (1893年)



カリフォルニア館 (1893年)



ホワイト・シティー (1893年)



日本館 (1893年)

③、D. H. バーナムに師事する

カルフォルニア館竣工数日前、下田はシカゴ万博工事総監督長を務めるD. H. バーナム(1846~1912)に書簡を送り、バーナム事務所において鋼骨建築法を学びたい旨希望を伝えた。バーナムは万博工事における下田の勤勉ぶり等に注目していたので、入所を即決で許可した。下田は、直ちに西部電信会社ビルの増築実施設計の副主任となり、建築技師としての活動が始まった。

バーナムは、大学等で正規の建築教育を受けずに世界的建築家となった人物で、ルート(1850~1891)と協同で事務所を経営。彼の死後、バーナム事務所を設立。シカゴ万博の計画を主宰し、その建築で成功。1894年にはアメリカ建築家協会会長(AIA会長)に就任。



バーナム

1901年、ワシントン美化計画委員会議長。さらに1909年、シカゴの都市計画を委託される。クリーブランド、サンフランシスコ、マニラ等諸都市の都市計画諮問委員も務めた。バーナムは、事務所経営に小工事分配法をとり、各工事主任者や次席設計製図者に適宜分配し、責任をもたせ彼らの勇氣と研究意欲をかきた



リライアンス・ビル (1895年)

て、数百人の所員から慈父のように慕われた。バーナムは、モナドノック・ビル(1891年)、リライアンス・ビル(1895年)などの商業主義的古典主義建築を設計。下田はリライアンス・ビルの建築工事に参加した。これは、全面ガラス張りの鉄骨構造の高層ビルディングで新

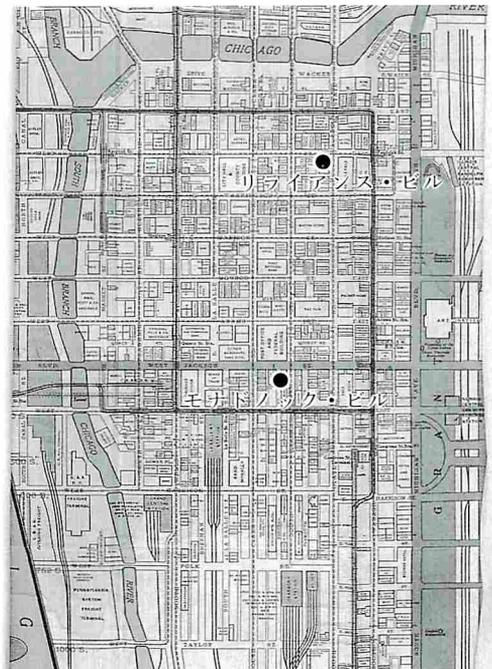
時代到来を告げる建物だった。

④、G. K. シモダ事務所を開く

1895年5月、下田はシカゴ市コック郡の法廷においてアメリカ公民権を取得した。市内南部32区のケンウッドに独立住居を構え、同年秋にはバーナム事務所を辞し独立した。G. K. シモダ事務所は、シカゴ市のモナドノック



モナドノック・ビル (1891年)



シカゴ市街図 (中心部)

ク・ビル14階に2室を賃貸し業務を開始した。ワシントン州庁、ミネソタ州庁等の懸賞設計に参加、ハイバニアン銀行の大改修及び冷気通風工事を完成し、名声を博した。

⑤、日本人初・アメリカ建築技師免許取得とシモダ事務所を訪れた日本人たち

1897年7月、下田はA I A試験官による厳格な審査を経て、アメリカ建築技師免許を取得した。許可番号471号、日本人初の快挙だった。この間、1896年秋にはアメリカ人女性を妻に迎え、各種の建築工事を手がけた。

シカゴで活躍する下田を頼って、大勢の日本人が訪れた。『思想と建築』の記述では、野村・大島・片山の3人が注目される。

鉄道技術者・野村龍太郎(1859～1943)は、明治29年から同31年にかけて、欧米鉄道事業を視察。土木工学的見地から、東京駅の建築を検討した。下田は東京駅意匠設計案を野村に提供。地元紙に報じられ喝采を博した。

独・フライブルク鉱山大学卒の大島道太郎(1860～1921)は、八幡製鉄所建設のため、明治29年から翌年にかけて欧米を視察。下田は大島の求めに応じ、スミス及びヴェニーと研究。八幡製鉄所配置意匠設計を提供、建設に貢献した。

宮廷建築家・片山東



野村龍太郎



大島道太郎



片山東熊

熊(1854～1917)は、東宮御所建設のため、明治30年から翌年にかけて欧米を視察。下田は片山をバーナムに紹介し、全面的な鉄骨構造に設計変更させた。構造設計はバーナム事務所のジャンクランドが協力した。

5、帰国後の活動

①、東京に下田菊太郎建築設計事務所を開く

1898年、米西戦争が勃発。アメリカに一時的な経済恐慌が到来した。下田は、バーナムとともに師事した陸軍工兵監・W.S.スミス少将の勸告をいれ、鋼骨低廉建築法を普及発展させるため、日本に帰国することを決意。明治31年(1898)8月、妻を伴って帰国した。帰国直後、この建築法の普及のため、『新式耐火、耐震、耐風、防湿、防寒、防暑、遮音、衛生、軽量、耐久家屋建築法』を著し、知己朋友に頒布した。しかし、日本ではまだ期が熟さず、この普及にはさらに10年の歳月を要した。

下田は、東京・京橋区西紺屋町4番地に、下田菊太郎建築設計事務所を開いた。

明治32年(1899)、矢野文雄の実弟・岩田武雄の紹介で、鉄道作業局長官・松本荘一郎(1848～1903)を訪問した。松本は、大学南校を経てアメリカのレンセラー工学校で土木工学を専攻。卒業後、米人・クロフォードと協力し、北海道で幌内炭坑を開発。さらに小樽手宮まで鉄道を敷設し、北海道鉄道の基礎をつくった。さらに、日本の鉄道事業では、イギリスに留学した井上勝につぐ重要人物だった。アメリカ帰りの下田は、資性闊達、優れた学識



下田菊太郎



松本荘一郎

を有し事務能力にも長じた松本とは互いに共鳴するものがあつた。

松本はさっそく増田礼作に命じ、鋼骨機関庫の設計を依頼。また、日比谷練兵場で下田の耐火材料及び構造実地試験を自ら部下の増田礼作・野村龍太郎といっしょに実見した。

②、横浜での建築活動

イ、転居のいきさつ

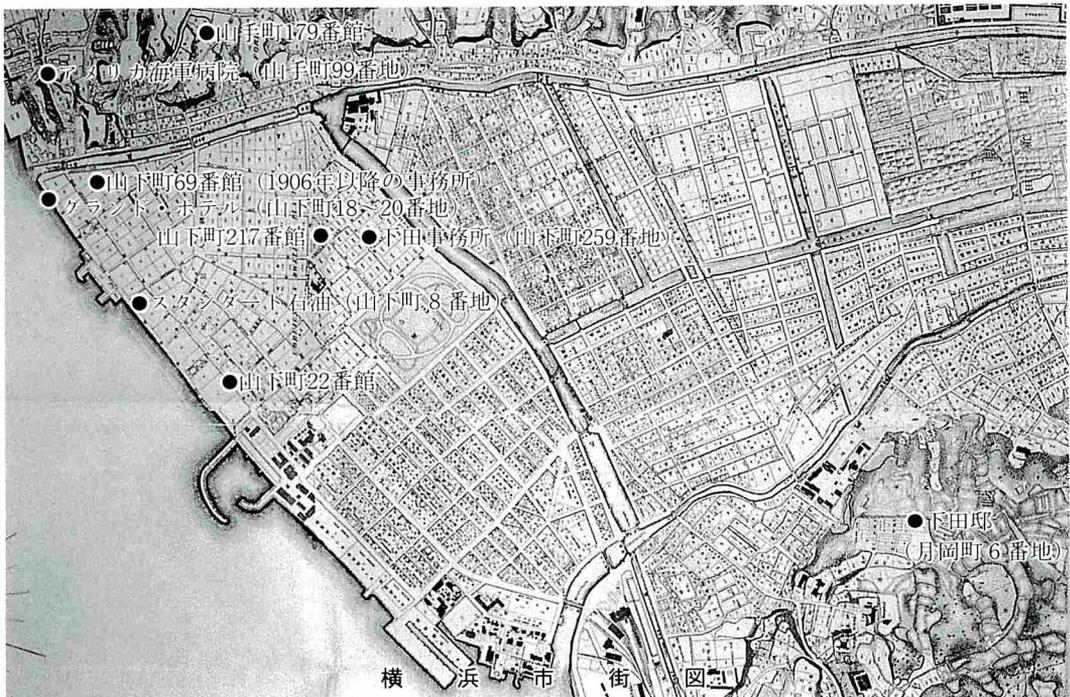
明治32年冬、横浜のジャーデン・マヂソン商会日本支配人・ウォーターは、横浜山下町22番館が火災に罹り、新築設計を下田に委嘱した。これは、下田事務所にとって、在留外国人による最初の事業依頼であつた。下田はアメリカの建築構造に英国風の建築様式を加味してこれを竣工させた。

ところで、ジャーデン・マヂソン商会は、イギリスの東洋貿易を担う商社で、日本の近代化に貢献した。幕末の長藩留学生はこの支援を受け、山尾庸三や井上勝がイギリスの大学で学んだ。山尾は、ロンドン大学で学び、工部大学校の生みの親となり、工学教育に貢

献した。また、商会は日本の依頼により、工部大学校のお雇い教師の選定にもあづかつた。この商会のもと使用人が有名なトーマス・グラバー。彼は、幕末薩藩留学生に資金を提供し、明治政府誕生の功労者のひとりとなつた。

明治34年(1901)3月、横浜外国人商業会議所副頭取・リンズレーの倉庫焼失の報に接し、下田は横浜進出のチャンスと捉え、直ちにリンズレーに面会。自己の経歴と建築事業上の抱負を述べ起用を求めたところ、4月から専属の技師として採用された。そこで、下田は横浜に事務所を移転、本格的な建築活動を開始する。同年7月、リンズレーは郷里ボストンに帰省するに際し、機械技師・ブレナーとふたりを総財産管理人に任命。このため、横浜在留の外国人間で下田の信用はいっそう高まつた。

明治34年、リンズレーの山下町217番館倉庫で基礎コンクリートに鉄筋を加え、同所有の磯子の禅馬工場で最初の鉄筋構造の建築を建てた。グラッド・ホテルは山下町18～20番



地の海岸通に面した名建築であったが、長年月の風雨によって老朽化。下田はホテル側の求めに応じ、改修工事を実施した。この後、下田は同ホテルの建築顧問を務めた。

ロ、下田築造合資会社を設立

明治36年(1903)6月10日、事業の拡大に対応し、下田築造合資会社を設立した。本店は横浜市山下町259番地、代表社員は田中鋭男、下田菊太郎は金五千円有限・横浜市月岡町6番地に居住。目黒貞治は金一百円有限・東京市牛込区市ケ谷仲ノ町41番地と記され、6月13日に会社登記された。

目黒貞治(1852~1917)は、明治13年から秋田県会議員、明治27年から衆議院議員選挙に3回当選。明治36年は元衆議院議員の身分であった。目黒と下田がいつからの知り合いであったかはわからない。しかし、下田の帰国後まもなく、安田財閥の総帥・安田善次郎の紹介者として登場している。会社設立に郷土出身の政治家の後ろ盾が必要だった。

代表社員の田中鋭男は不詳。その他、社員の幾人かは、横浜開港資料館の調査で判明している。工手学校卒の伊達陶二郎・矢田鉄三が勤務している。

さて本社の所在地である山下町259番地は、今は横浜市立商業高等学校の校地に合併されその裏門付近とみられ、中区山下町259-1番地に相当する。

また、月岡町6番地は、今は西区老松町19番地。ラジオ日本のビルが建っている。



目黒貞治

●設立会社
○西區 下田築造合資会社
本店 横浜山下町二百五十九番地
目的 築造合資会社
設立の年月日 明治三十六年六月十日
代表社員の氏名 田中鋭男
社員の名を住所別並に列記す 目黒貞治 金五千円有限者 横浜市月岡町六番地
下田菊太郎 金一百円有限者 東京市牛込区市ケ谷仲ノ町四十一番地 目黒貞治 金
解無限 横浜市月岡町六番地 田中鋭男 六月十三日 設立

「横浜商業会議所月報」第81号(1903年)

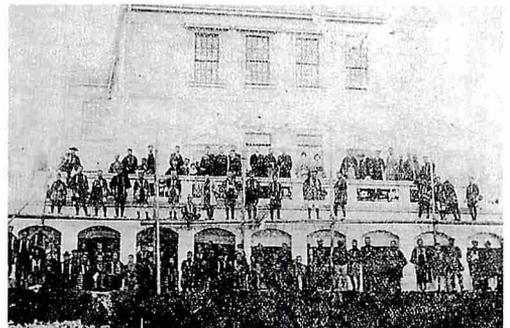
ハ、下田邸の建築

商業登記にある月岡町の下田邸は、明治34年(1901)に建造された。

月岡町は横浜水道・野毛山の浄水場に隣接し、横浜市街地を一望する高台にある。下田邸はその最高地点に建設された。

建物は鉄筋コンクリート3階建、1階の48畳の部屋は職方集会室、2階は日本客間、3階は外客招待室とし、別にクラブハウスのな球技室・酒場・碁棋室・露台を設け、ドイツ製スタインウエー・ピアノを購入し、在留外国婦人を楽しませた。

当時の横浜市長・三橋信方(1856~1910)は下田邸の威風堂々たる建築に感動。横浜市に譲渡してくれるよう要請。明治40年譲渡した。その後市は美術倶楽部に売却し、関東大震災で全焼したという。しかし真実は、下田邸は競買に付され、横浜市が落札。改修工事を行



下田邸外観(1901年)



旧月岡町付近

い市長公舎としたものの、暴風雨で大破損。大正元年（1912）建物は解体され、土地も転売された。

二、充実した建築活動

・スタンダード石油横浜支店を設計

山下町8番地に建築された米・スタンダード石油会社横浜支店の設計に際し、英人・コンドル、米人・ガーディナー（1857～1925）とともに略設計を嘱託された。支店長・コーフェンは下田菊太郎の略設計を採用した。コンドルは岩崎家茅町邸・三菱1号館などの名建築を設計。ガーディナーはハーバード大学建築学科を卒業、立教大学新校舎や日光真光教会などの建築を手がけた。この2人を退けて指名設計の勝利者となった意義は大きかった。

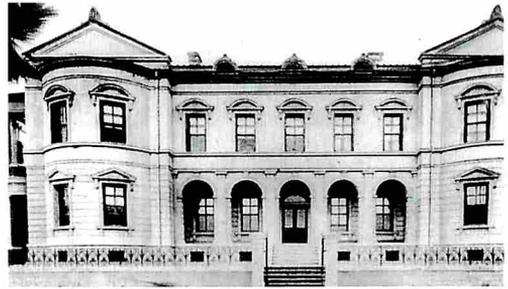
・神戸トア・ホテルなどを手がける

サミエル商会支配人・ホールスタインは、同神戸支店長の邸宅に新たにホテルを建設することを計画。シカゴ時代、グレート・ノーザン・ホテルの設計に従事した下田に、設計を依頼した。下田は英国風の山腹家屋式を採用。構造は木骨・鉄骨鉄筋法を按配し、神戸海岸通りのオリエンタル・ホテルと人気を二分する名建築を設計した。石川達三は小説『蒼氓』の冒頭で、「右手は贅沢な尖塔をもったトア・ホテルに続き」と描写している。

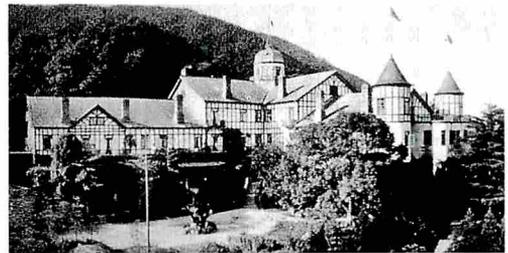
・重要文化財に指定された香港上海銀行長崎支店

香港上海銀行はイギリスの外国為替銀行で、長崎支店は明治25年（1892）に開設され、当初ブラウン商会内で営業した。明治34年、J.R.M. スミスの勧告により、本格的な銀行を建設することに決定。明治36年（1903）3月の重役会議で、新社屋の設計が提示され承認された。建設工事費は、6,575,000円。設計は下田菊太郎、工事監督は下田築造会社の技師・矢田鉄三が務めた。建築工事は明治36年に着工、明治37年（1904）に竣工。同年11月、新社屋に移転開業した。

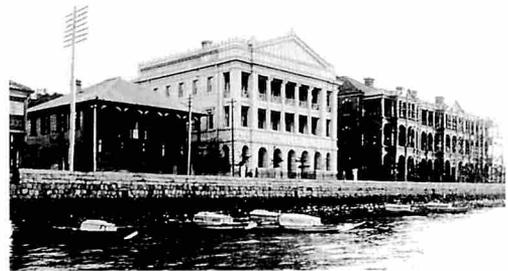
この建物は、下田菊太郎設計の現存する唯



スタンダード石油横浜支店（1904年）



神戸トア・ホテル（1907年）



香港上海銀行長崎支店（1904年）
（中央の建物、その右隣はコンドル設計の長崎ホテル）

一の建築で、正面は石造の大オーダーによる重厚で端正なつくりとなっており、長崎海岸通りの代表的な近代建築である。10万人署名の保存運動を経て、平成2年（1990）に重要文化財（建造物）となり、同7年（1995）保存修理工事が終了。資料館として再生した。

6、その後の活動

①、上海時代

明治40年（1907）までの横浜時代の華やかな生活に終止符をうち、上海に渡った。

渡航の時期は正確には分からない。渡航最

初の目的は、上海外国人倶楽部の懸賞設計当選者・ターラントが工事途中で死亡し、後継の意匠設計者として招聘されることになったためである。

上海に赴任した下田は、上海外国人倶楽部を竣工させ、ここで外国人や在留邦人の信用を獲得した。下田は、明治44年(1911)まで2・3年間、上海で活動し、船主ロバート・ダアラの子息邸、ジャーデン・マヂソン商会のウインタナラー邸、ラヴィン邸、上海日本人学校、日本郵船会社の上海碼頭埠頭棧橋の設計を委嘱され、日本人倶楽部の略設計を完成した。上海の租界地には、外国仕込みの日本人建築家が集まり、平野勇造や福井房一などアメリカで建築修業した人々が活躍した。

②、東京時代

イ、帝国ホテルの設計をめぐる

明治44年(1911)、下田は帝国ホテル支配人林愛作の依頼により、同ホテル全面改築のため、略設計を携えて帰国した。略設計の平面プランは、有名な宇治平等院鳳凰堂を模し、中庭を日本庭園とし、建物内部に松島や天橋立などの日本の名勝を配し、耐震性を考慮した設計だった。しかし、日本で再起をはかるF.L.ライトの積極的な働きかけにより、状況は一変。帝国ホテルの本設計は、ライトに委嘱された。下田はこれをホテル側の契約違反、下田案とライト案の酷似は下田案の著作権侵害にあたり、ホテル側を難詰。最終的には和解した。

その後、ライトは再びアメリカで復活。世界的な建築家となった。また、帝国ホテルは関東大震災を辛くもくぐりぬげ、ライトの名をさらに高めた。下田とライトとはシカゴ時代に面識があり、下田の妻はライトの建築事務所秘書だった。そのためもあってか、ライトは『自伝』において、下田は自分の事務所の製図工で才能に乏しく、叩き出して解雇した。黄色の顔と邪悪な目つきの日本人であった。と、口をきわめて酷評している。

ロ、議院建築設計変更を求め国会請願

帝国議院(国会議事堂)の改築は、大正5年(1916)妻木頼黄がなくなり、辰野金吾の手に帰した。臨時議院建築局と常務顧問・顧問などの主要ポストは辰野の教え子らで固められ、議院建築意匠設計応募案の審査が進められ、大正8年(1919)秋に当選案が発表された。



下田菊太郎の設計案(1919年)

この当選案は、日本の建築家を失望させた。下田もそのひとりであった。翌年、彼は議院建築設計の変更を求め、下田案をまとめ国会に請願書を提出。44・46帝国議会で審査され、請願は2度とも採択された。下田は自分の設計案を帝冠併合式と名づけ、欧米建築を直写する日本建築界に問題を提起した。

ハ、『思想と建築』を出版

昭和3年(1928)12月、下田菊太郎は『思想と建築』を日本語・英語の二カ国語でまとめ自費出版。この本は下田の自叙伝であるとともに、辰野を頂点とする日本建築界の陰の部た歴史を語る貴重な文献として重要である。

7、むすびにかえて

下田菊太郎は、秋田県や日本建築界から全く忘れられた人物だった。しかし、明治時代にいち早く高等教育を受け、海外に建築修業に出かけ、アメリカ人として活躍した事実は注目に値する。日本人や日本文化、さらに国際交流や近代建築を語るとき、秋田県や日本にとって忘れてならない人物と思われる。